

いしづち

2022.3

MARCH

No.145



公益社団法人 愛媛県建築士会

Ehime Society of Architects & Building Engineers

<http://www.ehime-shikai.com>



道後温泉の第二の人生
世界建築紀行 クメールの微笑みと世界三大仏教遺跡アンコール・ワット
東京街歩き

1	道後温泉の第二の人生	道後温泉事務所 一級建築士 野本 健……①
2	世界建築紀行 クメールの微笑みと世界三大仏教遺跡アンコール・ワット	西予支部 松山 清……⑦
3	東京街歩き VOL.1	四国中央支部 尾藤 淳一……⑬
4	委員会報告 令和3年度中四国まちづくり委員長会議	文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……⑰
	ヘリテージで訊ねた大洲の建物	文化財・まちづくり委員会 中山 百合子……⑲
5	支部報告 素鷲神社文化財調査レポート	四国中央支部 支部長 岸 良一……⑳
	コロナ禍における大洲支部活動	大洲支部 支部長 神田 孝一……㉑
	「こんな家が、あったらいいのにな！」絵画展	西予支部 支部長 水野 正一……㉒
6	けんちくの輪 建築と釣りとワンちゃん	松山支部 大西 勝秀……㉓
	古民家に学ぶ	宇和島支部 與那原 浩……㉔
7	お知らせ 令和4年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について	事務局……㉕

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。



アクリル画

題：「黒瀬ダム」
[表紙画について]
(西条市)

黒瀬ダムは、洪水調節や農業用水などの不特定用水の補給及び工業用水の確保を目的として建設された多目的ダムであり、昭和39年度から調査を開始し、昭和41年度工事着手、昭和48年3月に完成した。黒瀬ダムが位置する加茂川は、四国山脈の霊峰石鎚山をはじめ、瓶ヶ森、笹ヶ峰等の連峰にその源を発し、谷川、市之川等の支流を併せ、西条市内の沖積平野を貫流し燧灘に注ぎ込む県下有数の二級河川。

参考文献/愛媛県ホームページより

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
1980 小学校から高校まで松山在住
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞
(愛媛県建築士事務所協会主催)
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996 日本工業大学建築学科 卒業
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」
(新潮社)の装丁担当
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞(東京/日動画廊)
2010 愛媛県美術館に作品「ドライブフラワー」收藏される
2015~17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「櫛リチエルカ」を設立
2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員/審査員

道後温泉の第二の人生

執筆：道後温泉事務所 一級建築士 野本 健

監修：文化財・まちづくり委員会 委員 花岡 直樹



▲明治時代の道後温泉本館（提供：道後温泉事務所）

<ことわり>

以下記載内容は、現在の道後温泉本館保存修理工事の状況や収集できた文献から総合的に判断した内容を記載している。そのため、調査状況により新たな知見が得られた場合、記載内容に訂正の必要が生じる可能性はある。

はじまり

道後温泉本館は日本最古の温泉と言われ長年にわたって改築を繰り返してきた歴史がある。今回は主に近代の改築の歴史を記載する。

●道後温泉本館改築の歴史

- 天保5年(1834) 養生湯の改築
- 明治5年(1872) 神の湯本館の改築(2層楼)
- 明治11年(1878) 新湯の建設
- 明治25年(1892) 養生湯の改築(現在の南棟の前身)
- 明治27年(1894) 神の湯本館の改築
- 明治32年(1899) 又新殿・霊の湯棟の建設
- 大正13年(1924) 南棟の改築、玄関棟の建設

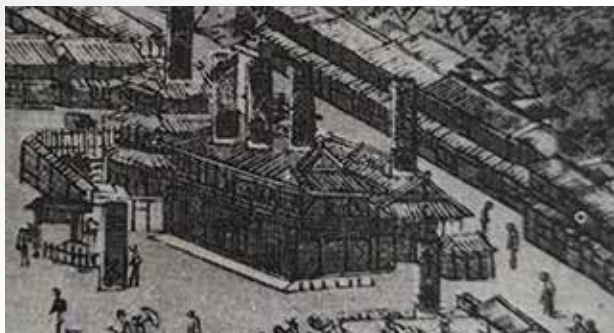
これが道後温泉本館の近代の建築に関する歴史の主な流れである。昔は改築を行う際、前身となる建物の木材や瓦などを再利用することが普通であり、道後温泉にあった建物などの多くは現在では見ることでできない過去の建物などに再利用された。このような歴史的な流れが人々の記憶から忘れられるのが不憫でならず第二・第三の人生をまとめ、執筆させていただいた次第である。

道後温泉の第二の人生

養生湯と松湯

天保5年 「養生湯」

明治25年頃 「松湯」(現在の樁の湯)



▲道後温泉本館と養生湯(明治14年頃) (提供：道後温泉事務所)

伊佐庭如矢が町長になって最初に改築を行ったのは養生湯であった。天保5年に建築されて以降、無料の公衆浴場であったことから改築費用を確保できず、朽損がはなはだしい状態だったと言われている。

伊佐庭如矢は今後の養生湯のためにも入浴料を取ることを発表すると多くの人々から反対の声が上がった。そのため、改築前の養生湯を現在の樁の湯の場所に移築し、無料の公衆浴場「松湯」を設置することで反対の声を抑えたと言われている。

湯釜薬師

天平勝宝年間 「一ノ湯の湯釜」

明治27年頃 「湯釜薬師」(振鷲園)

昭和25年頃 「湯釜薬師」(道後公園)

湯釜薬師は天平勝宝年間(749~757年)に作られたと伝えられ、道後温泉本館を改築した明治27年まで一ノ湯の湯釜として使用されていた。

伊佐庭如矢はこの湯釜を自身が整備した振鷲園に設置した。(現在の振鷲亭付近)

その後、昭和25年頃に道後公園へ移設し、昭和29年、愛媛県の有形文化財(石造美術)として指定された。



▲湯釜薬師(振鷲園にあった時代)(提供:二神 将)



▲湯釜薬師(令和3年時点)(道後公園)

神の湯本館(2層楼)

明治5年 「道後温泉本館」(2層楼)

明治27年頃 「振鷲亭」後に「風詠館」と

呼ばれる(振鷲園)

明治32年頃 「風詠館」(道後公園)

昭和2年頃 「道後公会堂」(道後公園)

道後温泉本館は明治5年に改築された。その後、規模が狭く観光客をもてなせないことを理由に明治27年、伊佐庭如矢が現在の姿の3層楼への大規模な改築を行った。

その後、明治27年頃、2層楼の神の湯本館は湯治客をもてなすために伊佐庭如矢が整備した振鷲園で「振鷲亭」として使用された。その後、明治30年頃に「風詠館」と名前を変えた。

伊佐庭如矢は振鷲園だけでは散策場所として狭いと考え、明治32年頃に道後公園の整備を行ったが、一部の場所が殺風景と考え「風詠館」を道後公園へ移築した。

再び昭和2年に「風詠館」の古材を再利用して「道後公会堂」を建設した。道後公会堂は能といった芸能や戦時中は傷病者を看病する場所としても利用された。

昭和22年に「新温泉」が建設されるために「道後公会堂」は取り壊された。明治5年に建設された2層楼の道後温泉本館は姿・形を変え、約75年、道後の町を見守った。



▲道後温泉本館(明治5年頃)
(提供:道後温泉事務所)



▲風詠館(明治32年頃)(提供:道後温泉事務所)



▲道後公会堂(昭和2年頃)(提供:道後温泉事務所)

道後温泉の第二の人生

新湯

明治11年 「新湯」

明治32年頃 「湯之町役場」(道後温泉本館北側)

道後温泉本館は新しい浴場を建設する度に新湯という名称を付けていた。現在の又新殿がある場所には3層楼の新湯が明治11年に建設された。これは当時、神の湯本館の一ノ湯を貸切風呂の「幕湯」としても利用され、その時に利用される上等客に配慮したものであった。

その後、新湯は道後温泉本館北側に移築され「湯之町役場」として利用された。



▲道後温泉本館(明治27年頃)(提供:道後温泉事務所)



▲道後温泉本館(大正13年頃)(提供:道後温泉事務所)

養生湯の湯釜

明治25年 「養生湯の湯釜」

昭和48年 「放生園の噴水」

平成14年 「放生園の足湯」

養生湯は明治25年、伊佐庭如矢が町長となって初めて改築を行った建物である。その時に新たに湯釜を設置した。この湯釜の特徴は2つの湯口があり、真ん中に間仕切りがあって男湯、女湯、それぞれにお湯を注いでいた。デザインは埼玉県氷川神社の宮司であり画家でもあった「山田衛居」、彫刻は広島県尾道の「石井源兵衛」に依頼した。

昭和29年に浴室を改築するまで使用されていた。その後、昭和48年に放生園を整備した時に池の噴水として利用され、平成14年に現在の足湯としての役割に変わった。



◀養生湯
(明治25年～
大正12年頃)
(提供:
道後温泉事務所)



▲放生園(令和3年時点)

霊の湯男子浴室間仕切り壁

明治32年 霊の湯男子浴室の「間仕切り」

昭和61年 松山市東消防署の「花壇」

又新殿・霊の湯棟の霊の湯浴室は明治32年に建設され、真ん中に間仕切り壁を入れることで男女の浴室として利用されていた。間仕切り壁を残しながら昭和36年に霊の湯男子浴室として利用され、昭和61年に浴室は鉄筋コンクリート造に改築された。その時にあった石の間仕切り壁は現在の松山市東消防署の花壇として利用された。



▲ 霊の湯浴室 (昭和61年改築前) (提供: 花岡建築事務所)



松山東消防署 (令和3年時点) (提供: 花岡建築事務所) ▶

火の鳥ラッピングアート

令和元年 道後温泉本館保存修理工事(前期)素屋根テント膜

令和3年 道後小学校、湯築小学校テント膜

道後温泉本館保存修理工事(前期)工事期間中、屋根の葺替え時、風雨から建物を守るため素屋根という覆いを掛けて工事を行った。前期工事は火の鳥とコラボレーションを行い、華やかなテント膜となった。前期工事終了後は道後小学校、湯築小学校に寄贈され、テント膜として利用されている。



火の鳥ラッピングアート
(令和元年)
(提供: 道後温泉事務所) ▶



◀ 火の鳥テント膜
(令和3年時点)

道後温泉碑

明治19年頃 道後温泉碑(養生湯北側)

明治27年頃 振鷺園

昭和25年頃 道後公園

「道後温泉碑」は明治19年頃に作られ、養生湯の北側にあった。道後温泉本館を明治27年に改築した際に湯釜薬師と共に振鷺園へ移され、その後、お互いに道後公園へ移動し、湯釜薬師の後方で鎮座している。



▲道後温泉碑(明治19年頃) (提供：道後温泉事務所)



▲道後温泉碑(振鷺園にあった時代)
(提供：二神 将)



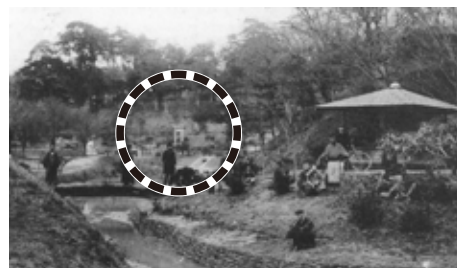
▲道後温泉碑(令和3年時点)

稲荷神社

明治27年以前 道後公園

明治32年頃 第四分湯場横

明治27年頃、伊佐庭如矢は自身が整備した振鷺園では狭すぎて湯治客をもてなすことができないと考え、愛媛県と交渉し、明治32年頃に道後公園の整備を行った。その時に稲荷神社を現在の第四分湯場の横に遷宮した。



▲稲荷神社
(明治27年以前)
(提供：二神 将)



◀稲荷神社(令和3年時点)

修明館

明治40年「湯築尋常高等小学校」

大正12年「修明館」(道後公園駅前)

現在の松山市東消防署の場所には明治40年に湯築尋常高等小学校が建設された。(現在の道後小学校の前身) その後、児童数の増大に対応できないため、現在の道後公園駅前に移築され「修明館」という名称に変わった。



▲湯築尋常高等小学校
(明治40年頃)
(提供：道後温泉事務所)



◀修明館(令和3年時点)

椿の湯の湯釜

昭和28年 椿の湯

昭和59年 いこいの家

昭和28年に地元の公衆浴場であった「西湯」、
「砂湯」を改築して「椿の湯」と名称を変えた。
湯釜は姫ダルマをデザインした卵型。昭和59
年に再び「椿の湯」を改築した時に高齢者や障
がい者の方が利用できる「いこいの家」を設置
した。その時に「椿の湯」の湯釜はいこいの家
の湯釜として利用され、人々の心と身体を癒し
ている。



▲ 椿の湯 (昭和28年頃)
(提供: 道後温泉事務所)



いこいの家 ▶
(令和3年時点)

鷺の湯の湯釜

昭和2年 「鷺の湯の湯釜」

平成29年 「道後温泉別館 飛鳥乃湯泉の湯釜」

昭和2年に現在の冠山駐車場へ上る料
金ゲート付近に町民専用の浴場である鷺
の湯を建設した。昭和38年に「温泉セ
ンター」を建築するために取り壊された。
「鷺の湯」の湯釜は道後温泉事務所で保管
され、飛鳥乃湯泉で再利用された。



▲ 鷺の湯 (昭和2年頃)
(提供: 道後温泉事務所)



◀ 道後温泉別館 飛鳥乃湯泉
(平成29年)
(提供: 道後温泉事務所)

■あしがき

道後温泉にあったものは多くの場所に移動し第二・
第三の人生を送っている。私自身も散在した資料をこ
のように1つにまとめると改めて多くあることを再認
識し、驚いてしまった。今回記述させていただいた内
容を元に歴史を感じながら道後の町を「まちあるき」
してもらえればと願い筆を置く。

■参考文献

「道後温泉 増補版」 「海南新聞」
「愛媛県紳士録」 「道後で暮らす語り部の記憶」
「道後温泉本館の歴史」
「道後温泉の研究 重見辰馬」
「富田喜平は語る」
「二神鷺泉と道後湯之町」
* 本書掲載の文章・図版の無断複製・転載を禁
じます。

クメールの微笑みと世界三大仏教遺跡 アンコール・ワット

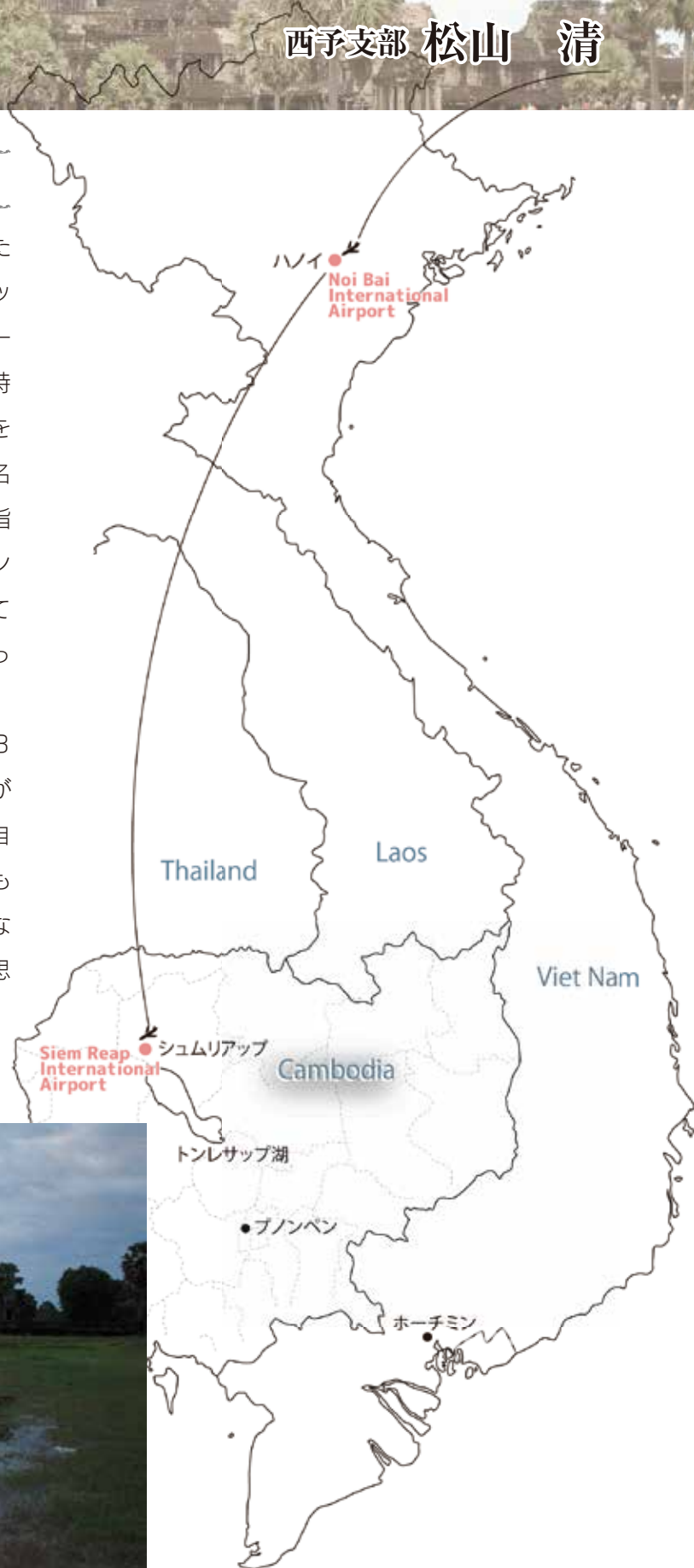
西予支部 松山 清

1 西予から”アジアの至宝”を訪ねる

アンコール遺跡は1992年に世界遺産に登録された世界三大仏教遺跡の一つで、カンボジアのシュムリアップにあります。残り二つはインドネシアのボロブドゥール遺跡とミャンマーのバガン遺跡で、それぞれに独特の仏教的な宇宙観があり、上座部仏教（小乗仏教）を代表する遺跡です。アンコール・ワットばかりが有名ですが、アンコール遺跡というのはもっと広範囲を指し、その中の一つアンコール・トムにあるバーミヤン寺院の四面仏の“クメールの微笑み”は、「世界の果てまでイッテQ」のスタジオセットのモチーフにもなっています。

シュムリアップへは、2018年6月8日から2泊3日の日程で西予市内の10人で訪れました。一人旅が好きなのですが今回は珍しくグループ旅行となり、自由な行動は制約される反面、旅先での感動や思い出も共有出来て一長一短があります。それより、「みんな良く一緒に付き合ってくれたもんだ」と感謝の思いでした。

▼ 5つの塔を持つアンコール・ワット



2 夜行利用、関空からシュムリアップへ

カンボジアはビザが必要でちょっと面倒くさいかなと思っていましたが、写真画像を送ってクレジット決済すればインターネットで簡単に全員分のビザを取得できました。考えてみれば観光立国であるカンボジアにとってはこれが重要な収入となるため、しっかりと先払いさせるわけです。

飛行機は関空から出発だったので、夜行バスで西予市を出発。梅田のハービス大阪でエアポートバスに乗



▲夜行バスで梅田に到着



▲乗継のノイ・バイ国際空港



▲川岸には家が並ぶ



▲シュムリアップ空港ビル

り換え、午前中のベトナム航空でハノイ乗り継ぎ、シュムリアップまで行きました。シュムリアップへの直行便がないため、ハノイやバンコクなどを経由する必要があります。

ベトナム航空は初めてだったので、もう少し空いているのかなと思いきや、結構な混雑でした。ハノイ空港は、ノイ・バイ国際空港と呼ばれ、フラッグシップのベトナム航空のグリーン機体がずらりと並んでいます。

ノイ・バイ国際空港での乗り継ぎは、ビルを上へあがり下がりながらシュムリアップ行き出発ゲートへたどり着きました。空港はかなり田舎の農業地帯にあるみたいで、ダダッ広いターミナルです。

シュムリアップはカンボジアの首都プノンペンから北西約200kmの所にあり、国内最大の「伸縮する湖」トンレサップ湖の北岸に位置します。シュムリアップ着陸前に見えた川畔では水上生活の景観も見られ、川岸に沿ってずらりと家が並んでいました。多くの河川がカンボジアの中心にある巨大なトンレサップ湖に向かって流れ込んでいました。シュムリアップ国際空港に到着すると、エプロンから歩いてターミナルビルまでノコノコと行きます。



3 バイヨン寺院とアンコール・ワット

3.1 四面仏の塔を持つバイヨン寺院

アンコール遺跡の中心は、“神々の世界” アンコール・ワットと“菩薩の居城” バイヨン寺院で、アンコール遺跡としての世界遺産登録エリアは、周辺の自然や村なども含まれる約400平方キロメートルの広大な面積です。12世紀の初めにクメール王朝がアンコール・ワットを造営した半世紀後に、北側に隣接してバイヨン寺院を中心とした一辺約3kmの城壁を持つ王都“アンコール・トム”が築かれました。

アンコール遺跡の見学には事前に入場券を購入しておかねばならず、1日券（37\$）・3日券（62\$）・7日券（72\$）と3種類ある中、朝一番に3日券を

購入。アンコール・トムに向う途中、係員が検札のためバスに入ってきました。翌朝アンコール・ワットのご来光を見るためにも、事前にパスを購入しておかないと、朝は購入できないため入れないのです。入場券を購入後、まずアンコール・トムのバイヨン寺院へ向かいました。

阿修羅像がずらりと欄干に並ぶ南大門から歩いて入場しますが、そこからバイヨン寺院までは遠いため、再びバスで中心部まで移動。寺院全体は石が積み重なり、四面仏塔が乱立しているという印象で、それはクメール人独特の宇宙観を表す造りだそうです。



▲バイヨン寺院の四面仏
“クメールの微笑み”



▲バイヨン寺院全景



▲東面・第一回廊



▲橋に並ぶ阿修羅像



▲バイヨン寺院の南大門



▲回廊壁のレリーフ

▼寺院中心部の四面仏塔



▲象のテラス

▲神獣ガルダとテラス

伽藍はシンメトリーで整然と見たのですが、内部は複雑で地下室のような部屋や通路が多くありました。この遺跡の修復には日本が大きく貢献したという説明板も発見しました。

バイヨン寺院からアンコール・トムを散策、奥へ進むと昔、王宮があったエリアの“象のテラス”に出ます。ガルダに支えられたテラスもあり、当時の彫刻文化や建築技術について伺い知ることができます。石を積み上げてそれに彫刻を施すのがクメール文化の特徴ですが、それは今の時代まで何かメッセージをしっかりと伝えていると思えました。

3.2 三重回廊で塔が囲まれるアンコール・ワット

この日は午前中アンコール・トムを中心に観光し、昼食の後、アンコール・ワットをじっくりと見学しました。ガイドさんは遺跡の待ち時間考慮しながら観光客が多いタイミングを外しコースを工夫してくれたので、スムーズに遺跡巡りができました。

そのためアンコール・ワットへは西側の正面入口ではなくて、東側の裏参道から入りました。ここから入場する人はいなかったのですが、時間が経って塔の上から裏口を見ると、大勢が押し寄せていました。タイミングを間違えると、大混雑の中での見学となるどころでした。



▲水面に姿を映す早朝のアンコール・ワット



▲簡素な裏門から入場



▲第一回廊のレリーフ見学



▲軍隊行進のレリーフ



▲第一回廊内側の中庭

アンコール・ワットは建設当時ヒンドゥー教の寺院として造られましたが、16世紀後半に仏教寺院に改修され、現在も上座部仏教寺院となっています。

アンコール・ワットは5つの塔とそれを取り囲むように配置された三重の回廊で構成されています。まず、外側の第一回廊は“レリーのギャラリー”とも言われ、絵巻を見るようです。そこから内側に階段を登り、芝生の中庭を越え、さらに第二回廊の内側に出ます。さらに急な階段を登り第三回廊へ入ります。すると中庭と主塔が目の前にドーンと聳え立ちました。ついに、アンコール・ワットの中心に立ち、感無量。クメールの時代にタイムスリップした思いでした。



第三回廊へ登る
急な階段▶

▼ 第二回廊内側の中庭



◀ クメール文化を伝える踊り子



▲ 第三回廊に聳える四隅の塔



▲ 西側正面、仮設の浮橋



▲ 第三回廊内側の中庭

◀ 主塔の中央祠堂

4 クメール建築文化を伝えるその他のアンコール遺跡

シュムリアップには世界遺産に含まれる遺跡が100前後存在し、遺跡だらけと言ってもいいくらい。できるだけ多くの遺跡を訪問したいと思うものの、限られた時間の中でアンコール・ワットをより深く知るために、タ・プローム寺院へ向かいました。

タ・プローム寺院にもクメールのほほ笑みをたたえた仏塔が東門にあります。ジャングルの中から発見されたままのよ

帰りに第三回廊から急な階段を降りると、宮廷衣装の踊り子が待っており、一緒に記念写真に納まりました。

この雄大なアンコール・ワット寺院は約30年で造り上げられたそうで、全体にレリーフを散りばめた優雅な建物を短時間で造れる強大な権力と文化が、ジャングルの中にあつたことを証明しています。

帰りは西側正面参道が工事中だったので、環濠に仮設された浮橋を渡って遺跡を後にしました。



◀ 東塔門入口

うで、あちこちにスポアンという巨大な木が回廊を押し潰そうとしています。12世紀に創建された当時は5,000人の僧侶と615人の踊り子がいたそうで、その繁栄ぶりが伺えるような神秘的な寺院でした。この寺院は発掘されて整備中という雰囲気、巨樹の根が遺跡に絡みついていたり、遺跡自体が崩壊寸前で、それを鉄骨で補強しているなど熱帯の遺跡の管理の難しさを感じさせました。

その他、バンティア・サムレは二重式の回廊と小規模の中央祠塔で構成された形式で、窓もそろばん玉を縦に並べたような連子状窓が採用されているなど、クメール建築そのものでした。



◀ 巨樹の根が回廊を覆う
バンティア・サムレ ▶



▲ バンティア・スレイのリングの並ぶ参道

▲ 裏側から見た中央祠堂

バンティア・スレイはシュムリアップ郊外にあり、赤色砂岩で造られ赤い色が印象的な寺院で、男性性器をシバ神の象徴と考え、リングが参道に立ち並んでいます。その規模は大きくないのですが、他の遺跡とは違った洗練された美しさでした。遺跡を訪ねていくとクメール建築が主張するものを感じ、少しですが宇宙観と信仰について理解ができていくようでした。

5 アンコール遺跡の旅を終えて



▲ シュムリアップのマーケット

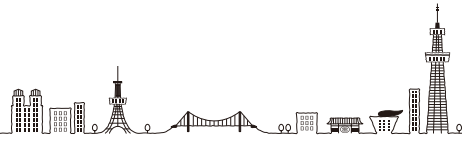


▲ 優雅なアプサラの踊り

シュムリアップは近代的な町ではなく、ジャングルの中にパッと開いた花のようなところでした。遺跡以外にもナイトマーケットやクメールの華“アプサ”の踊りなどカンボジアの文化を知ることができ、活気も感じました。

アンコール遺跡は仏教やヒンドゥー教の遺跡が思っていた以上に多く驚きました。四国八十八カ所巡礼が9回目となる私にとっては、アンコール・ワットは高野山のような所かなと思えます。アンコールの遺跡も四国のそれぞれのお寺も深く人々の心に根ざしてきたものだと感じたわけです。

多くのクメール建築美術を見学しましたが、見るべき遺跡がたくさんあり過ぎて、もっと事前学習をしておけばその違いなど理解が深まったのにと反省です。それから、海外へ行って、日本より美味しい食べ物はまずないと思っておいた方が間違いありません。



2021年11月、新型コロナウイルスによる制限が解除されたタイミングで、ちょうど東京に行く機会がありました。皆さんもそうだと思いますが、いつでも行けると思っているとなかなか足を運ばないところは、意外と身近にあります。愛媛の私たちにとって東京はそんなに身近ではないですが、かといってやはり日本の首都ですから、何かしら用事があっていくところではあります。新型コロナウイルスが発生してもうすぐ2年になります。テレビでは見ていたものの過ぎ去ってしまえば、東京オリパラも何かすごく遠い過去の出来事のように思えます。東京オリパラが決定されたころは、日本はこれからさらに変わっていく、成長していく、そんな期待感に胸が膨らみましたが、冬の到来とともにしぼんでしまったようです。しかし、今度東京へ行ったらあそこに行ってみたい、ここも行ってみたいという意欲ばかりが膨らんでいました。今回訪問したのは主に、新国立競技場、浜離宮、築地本願寺、赤坂迎賓館でした。有名なところばかりで知っている人も多いとは思いますが、私の旅日記にしばしお付き合いください。

新国立競技場



まずは、新国立競技場。ここの建物の説明は必要ないでしょう。近くには神宮野球場や代々木体育館、明治神宮などがあって、都会の中のスポーツ交流・憩いエリア・体力づくりスポット…どういった表現を使うのが適当かわかりませんが、このエリアは大好きです。特に季節ごとに表情を変えるイチョウ並木はお気に入りです。イチョウは黄葉した秋が美しいのですが、銀杏の実が落ちると大変な匂いに閉口します。しかし、ここは都市公園計画の観点から、メスカオスのどちらかしか植えていないので、そんな匂いとも無縁です(落葉の処理は大変でしょうが…)。

新国立競技場の中には入れませんでした。存在感は圧倒的でした。それでもイタリアローマのコロッセオのような建造物になりえるかな?と少し疑問に思いましたし、これを維持していくのには莫大な費用がかかるのだらうなと変な心配もしてしまいました。

浜離宮恩賜庭園

さて、次に向かったのは築地エリア。浜離宮恩賜庭園を散策しました。海水を引き入れた潮入の池と二つの鴨場を伝え、江戸時代には、「出城」としての機能を果たしていた徳川将軍家の庭園です。明治維新ののちは皇室の離宮となりましたが、現在は東京都に下賜された後、国の特別名勝及び特別史跡に指定されています。写真は、潮入の池に浮かぶ中島のお茶室と後ろのビル群です。天気が良かったので、水面に移る建物が美しかったです。庭園の中や道中でも植木や街路樹の手入れをしていましたが、東京ではかなりの植栽の維持管理費用がいるのだろうとここでも野暮な心配をしてしまいました。



築地本願寺

続いて、築地での2件目は、築地本願寺。少し前に日経新聞にライトアップの穴場として紹介されていたのですが、昼間に行きました。インドなどアジアの古代仏教建築を模した本堂は、伊東忠太氏の設計。オリエンタルなムードが漂う夜の外観は唯一無二の美があるそうで、次は夜に訪れたいと思います。



赤坂迎賓館

翌日もいい天気で、予約を入れておいた赤坂迎賓館を訪れました。赤坂迎賓館は、本館と主庭を見るのも予約が要りますが、比較的入り易いです。ただ和風別館は10名限定のガイドツアーで、事前申し込みで当選した人のみ見学可能です。本館も素晴らしいですが、せっかくなら和風別館は見ておくべきだと思いますので、お越しの際は日程が決まったらまず予約することをお勧めします。

迎賓館は、かつて紀州徳川家の江戸中屋敷があった場所に明治42年に東宮御所として建設されたもので、建築家片山東熊の総指揮の下に、当時の総力を挙げて建設されたネオバロック様式の西洋風宮殿建築です。しかし東宮御所としては数か月しか使用されず、国に移管されたのちは、国立国会図書館、内閣法制局、東京オリンピック組織委員会などの機関に使用されていました。その後外国の賓客を接遇するための施設の必要性が高まったため、5年の歳月と108億円の経費をかけ、村野東吾の設計で改修が行われ、昭和49年、現在の迎賓館が完成しました。



遊心亭

また、迎賓館本館の東側に位置する別館「遊心亭」は、和風の衣装と接遇のための施設として昭和49年、谷口吉郎の設計で新設されました。主和室では、池に差し込んだ太陽の光が反射して、天井や柱に水の揺らぎが映し出されていて、とても美しかったです。即席料理室は、天麩羅や寿司などがふるまわれる部屋ですが、賓客をもてなす安倍元首相がえびす顔で写っている写真が飾っていて、なんだか興ざめをしました。



気が付いてみれば、今回はほぼ旧徳川家ゆかりの地を見て回ったわけです。範囲としては広いですが、決して歩けないわけではありません。散策してもこれだけ近辺に見どころがある建物がたくさんある都市はあまりないと思いますので、皆さんも機会があれば楽しんでください。ちなみに今回の徒歩数は、全部で6万歩でした。適度な疲労感はありましたが、有意義で楽しい見学になりました。今回の表題を「東京街歩きVOL. 1」にしました。また次回報告できるよう願いを込めて。

令和3年度 中四国まちづくり委員長会議

文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和

また、山口県HMの活動として新聞などのメディアを通じて歴史的建造物の魅力を伝える写真展・見学会など歴史的建造物活用事業への協力、TV等マスコミ取材への協力、ホームページ管理とSNSでの情報発信を報告されていました。

開催日 令和3年11月13・14日

会場 山口県山口市 県政資料館（旧県会議事堂）
山口県建築士会館

参加者 1名（峰岡参加）



▲初日会場となった旧県会議事堂

昨年、11月13日・14日と山口県山口市にて中四国まちづくり委員長会議が開催されましたのでご報告いたします。

初日、会議は午後からの予定でしたが、午前中に山口県ヘリテージマネージャーのステップアップ講座があるという事で、朝から参加させていただきました。

旧県会議事堂の「議事堂」内が会場となっており、その凛とした空間に、身も心もが引き締まる感じがしました。

講座ではヘリテージマネージャー（以下HM）の仕事として、薬師堂の改修設計についての苦労や注意点、下関の近代化遺産30年と題して、旧下関英国領事館（国の重要文化財）の保存活用に関する話や、唐戸地区の文化財建造物や角島灯台のお話、原田副会長から「HMの多様な活動」を伺いました。重要文化財である英国領事館では活用を重視し、保存修理時に元に戻すことを最善とせず、現在のありように合わせた改修がなされたそうです。見てもらう文化財から、共に生活・活用をしてゆく文化財へと方向転換をしているのだと感じました。



▲旧県会議事堂内部

午後からは引き続き山口県HMのステップアップを兼ねての委員長会議となりました。山口県まちづくり委員会の原田委員長より、文化財を線をつなげ面で考えていく、まちづくりのエリアリノベーションの話に始まり、山口市大殿地区、長門市湯本地区のエリアリノベーションについて説明がありました。その後、各県における歴史まちづくり部会について活動報告などがあり、一日目を終えました。

二日目は山口県建築士会館へ場所を移し、各県におけるまちづくり部会の活動報告・意見交換がなされました。

各県の大まかにまとめた内容は次の通りです。

島根：景観まちづくりとして美保の街歩きをし、令和2年にリモートで景観まちづくり講座を行った。オンライン講座が行えたのは一つの成果であった。

岡山：地域づくり部会が応急危険度判定の訓練を行っている。ショートメールで防災の訓練、木耐震の教育、木のまちづくり班の立ち上げ。



▲二日目の会議の様子

広島：たてものがたりという活動やここで幅広い活動をしている。まちづくり委員が4人という事もあり、活動に限りがある。

徳島：研究会が各々に活動。福祉レベルによって仮設住宅の対応も必要。高齢化に備えた住まい〔耐震⇄福祉⇄防災〕。空き家への活動も盛ん（HP参照）。

香川：委員会はなく有志による独自の活動。小学生を対象に建築の話や街の課題を行政へ提案してゆくHMのかわりに「香川歴史的建造物保存活用会議」を発足。若手の人材育成も行う。

山口：HMIについて、士会会員・一般会員と難しく考えず運営している。一般の目線や意見が刺激になる事もあるので緩やかでいいのでは。6・7月に総会を

行い、パワポで報告後、まち歩きを行っている。

高知：補助もあり、耐震改修が進んでいる。防災が充実しており、県民の意識も大きい。防災フェスタで震度7の体験や、逃げ地図の作成を行っている。

「各県士会の枠組みとしての活動、個人の活動等様々な活動が行われているが、個人の活動は把握できていない県がほとんどです。それらをまちづくり員会が把握することも重要ですし、まちづくり活動に関わっていただける人々を育てることがまちづくり委員会の役割ではないでしょうか」という意見で会議を終えました。

お昼前から山口市大殿地区のまち歩きを参加者全員で行い、解散となりました。実りの多い委員長会議となりました。次回（令和4年度）は高知県で行われる事となっています。

景観写真コンテスト・萌芽事例の募集締め切りとお礼について

今年度7月から募集をいたしました「景観写真コンテスト」「良質な建築・美しい街づくりの仕組み・萌芽事例報告」ですが、昨年12月末をもって締め切らせていただきました。たくさんのご応募ありがとうございました。

写真コンテストは今年度3月に審査、賞については来年度発表の予定です。萌芽事例については引き続き募集していきたいと思っております。お楽しみに！



▲原田委員長のご案内でまち歩き



▲瑠璃光寺の五重塔

ヘリテージで訊ねた大洲の建物

文化財・まちづくり委員会 中山 百合子

実施日：令和3年11月28日

場所：大洲市 NIPPONIA・盤泉荘

参加人数：13名

個人的に、質実剛健、または簡素ともいえる武家屋敷よりも、絢爛豪華、贅をつくした商人の家を見るほうがはるかに楽しく感じます。財力があるからこそ集まった珍しい木材、その太さや長さや厚み、細かに配慮された造作や装飾のいちいちが、建築主と大工の思慮によって品よくまとまりながら独創性あふれる建物に昇華された様子は、ため息をつきながら見上げるしかありません。

そんな富豪の建物を見るのが好きな私にとって、大洲の商人が建てた家を、文化財・まちづくり委員の人たち、そしてかつて共に学んだヘリテージマネージャーの人たちと訪れる機会ができたことは大きな喜びでした。



今回訪れたのは、「NIPPONIAホテル」と「盤泉荘」という二つの建物です。ニッポニアというのは、古民家を改装して宿泊施設にしているホテルです。大洲神社の長い階段横にある高級旅館内部は、本当なら宿泊しなければ見られないであろうと思うのですが、建築士目線と空想の宿泊者目線との両方で見せていただくことができました。



▲二階より中庭を見おろす

外部からの視線をシャットアウトするための中庭の存在、全部を改装するのではなく古さを見せるために残さ

れた箇所。そして、建物の使い方として、360度ガラス張りの浴室やトイレを見て、建築士としては斬新なアイデアにびっくり。でも、そう若くない宿泊者目線になると、入浴の最中は見られたくないという思いがちらつき、泊まるなら露天風呂のほうが良いかもと思ったり、床の間を出入り口にするという発想に驚きながらも、いやいやそこは住宅として尊い場所ではないかと心の中で抗ったり。自分の固定観念や考えを見つめ直す良い機会になったと思います。



▲ガラス張りの水まわり



▲床の間をまたいで入る入り口



▲美しく整えられた寝室

次に訪れた、高台に建つ盤泉荘は、石垣や庭石からして目を見張る、立派なものでした。日本の大富豪の家は、建物だけが立派なのではなく、庭や築山が必須であることを改めて感じました。



盤泉荘について簡単にお話しします。盤泉荘（旧松井家住宅）は、フィリピンのマニラで貿易会社を経営し、東南アジアで百貨店他多角的な事業を行い巨大な富を成した松井國五郎氏によって大正15年に建設された別荘です。高台に建つ木造住宅の窓からは、肱川や富士山他の大洲の豊かな自然景観が一望できます。貿易商という仕事柄、建物には当時としてはさぞ珍しく高価であったろう南洋材が建材としてふんだんに使われていたり、当時の日本の建築では一般的ではないバルコニーがあったりと、この別荘を訪れた人たちがさぞ驚いたであろうと容易に想像することができます。



▲ 盤泉荘内部



▲ 盤泉荘のバルコニーから大洲を見渡す面々

古い建物を維持するとき、ついて回るのは費用の問題です。ニッポニアホテルのように自らが宿泊施設として

収益をもたらすのも一案ですが、歴史を背負った建物はいじらずにそのまま存続させるのも意義のあること。ヘリテージマネージャーは「歴史的建造物保全活用資格者」と訳されますが、活用についてはどうしたら良いのだろうかと考える機会にもなりました。



▲ 盤泉荘 大きなガラス戸が使われています

さて、大洲市には臥龍山荘という明治時代に建築された素晴らしい建物がありますが、またひとつ盤泉荘という名建築が増えたことは他市に住む者としてはとても羨ましく、さすが伊予の小京都と呼ばれるだけのことはあると思いました。と同時に、もしかしたら、まだまだ未発見の名建築が存在するのではないかと、そんな口マンを感じた1日になりました。



▲ 参加者集合写真

2022年は新年から新型コロナウイルス感染者が増えています。なかなか出歩く気にならないというかたのために、ちょっと写真多めのページにしてみました。お楽しみいただけましたら幸いです。

支部報告

そが
素鷲神社文化財調査レポート

四国中央支部 支部長 岸 良一

実施日：令和3年12月4日(土)

実施場所：四国中央市新宮町上山3132

コロナ禍で活動が制限される中で、支部活動では初めての文化財調査に取り組みました。今回調査したのは市内新宮町に建つ素鷲神社です。この神社は、文化財まちづくり委員会により調査され、後に四国中央市の文化財指定を受けた同じ新宮町の安楽寺や隣接する稲茎神社と同様に調査すべきとされていた神社です。

峰岡文化財まちづくり委員長のご協力を頂き、調査方法の講習からお願いし、その後、実測調査を行いました。



▲全景 尾藤建設のドローンにより撮影
右側が素鷲神社、手前から拝殿・幣殿・本殿
左側は、出雲神社の拝殿と本殿

素鷲神社は京都の八坂神社（明治になり祇園神社から改名）を本社とする神社で、東中予に21社あります。主祭神は建速須佐乃男命たけはやすきののおのみことと奇稲田姫くしなだひめ。日本神話で有名な「スサノオ」とその妻です。素鷲神社の狛犬に書かれている「牛頭天王ごずてんのう」は釈迦の生誕地 祇園精舎の守護神で、「スサノオ」と同体とされ、疫病を防ぐ神とされています。創建は1344年と「新宮」の地名の由来となった熊野信仰からは後になりますが、京都の祇園信仰がこの地まで影響を与えていたことがわかります。

建物は「本殿」以外に、祭祀・拝礼を行うための「拝殿」と、祭儀を行い幣帛を奉る「幣殿へいはく」があり、今回は彫刻や建築技術の高い「本殿」に注目しました。

屋根は仏教建築に多い方形、それに禅宗様の詰組、大仏様の挿肘木と仏教色がかかなり濃く出ています。これは祇園神社が当初、興福寺や延暦寺の支配を受けていたことから神仏習合が成立しており、その表れではないかと思えます。また、現存する算木積みによる石積み、土台に用いられた礎石、屋根の銅板葺きなどは近世以降にみ

られる工法であり、三手先・四手先ときょうの料椽や木鼻の彫刻など優れた建築技術が用いられていることから、幕末から明治にかけて活躍した塩飽大工の手によるものであると考えられます。技術の粋を尽くした建築物を見ていると、ぜひ見て欲しいと語りかけているようで当時の大工と心が繋がったような気がしました。



▲本殿

近世の社寺建築では屋根を受ける垂木の割付（枝割）を規準に各部の大きさを定めています。垂木寸法と軒の出を測ることで枝割を計算し、そこから柱芯々の寸法を導きだします。一つの部材から建物の寸法が判るなんて、改めて技術の高さを感じました。今回は文化財調査の方法から学ぶことができ、良い経験になったと思います。



▲CADによる立面図

コロナ禍における大洲支部活動

大洲支部 支部長 神田 孝一

コロナ禍における支部活動は昨年度来難しい1年でした。計画しておりました「建築士の日行事」「大洲産業フェスタへの参加」「建築士会全国大会ひろしま大会への参加」等ほぼ中止となり支部総会、理事会他参加会議などは書面開催となってしまいました。

その中で唯一コロナ禍の間を縫い開催されました、第21回「レンガのある風景」はがきコンクールの審査会が12月20日、大洲赤レンガ館において審査員13名にて行われました。応募総数約200点の中から愛媛県建築士会大洲支部賞を選出しました。

はがきサイズの中に非常によく書き込んでいます。

表彰式は残念ながら中止となりました。

昨年度に続き今年度も残念ながら年になりましたが来年度



▲十河早希さんの作品

は2年分の思いを一気に出すべく活動したいと思っております。

「こんな家が、あったらいいのにな！」絵画展

西予支部 支部長 水野 正一

本年は、西予市内の小学校（11校）を対象にした、「こんな家が、あったらいいな 夢の家」絵画展を行いました。

コロナ禍になってからの、久しぶりの支部活動でした。夏休み前に、各学校に参加のお願いに廻り、案内書を配布しました。少子化も進み学校統合などで、西予市全域でも11校しかありません……。

2学期の始まった頃に各学校へ絵画作品の収集に廻りました。参加校は9校、作品は134作品となりました。9月29日に審査会を行いました。



◀審査風景



◀受賞者 集合写真



◀表彰風景

学年毎に金・銀・銅を選び、3年生は特に良い作品が多かったため、急遽、佳作2作品を追加しました。

野村町の乙亥会館・1Fロビーに12月4日から12月19日の16日間、作品の展示をしました。そして12月11日には、表彰式を行いました。

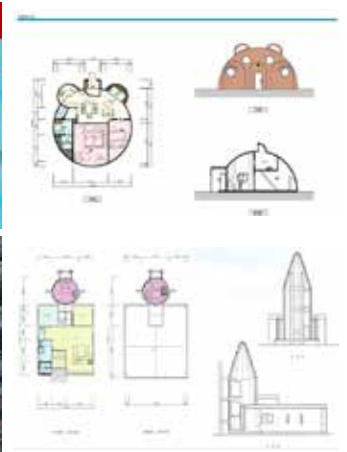
コロナの影響で表彰者の出席を心配していましたが、20人中19名が出席してくれました。

東は大野ヶ原、西は三瓶から来ていただき、「親は子供の為なら、距離など問題外」なのだなと思いました。

親御さんも合わせると70名ほどの表彰式となりました。比較的、ロビーが広いので、“密”にはならず行えました。表彰式に来られなかった1名については、学校に出向いて表彰状と記念品を手渡しました。

2作品を図面化してみました。子供たちの想像力には敵いません。久しぶりに楽しいイベントとなりました。

今後も以前と変わらず活動が行えるよう一日も早いコロナの終息を願うばかりです。



▲絵画を図面化

建築と釣りとワンちゃん

松山支部 大西 勝秀

松山支部（東地区）の大西です。

【建築への関わりについて】

私の職歴は、昭和41年、松山市内の工務店に就職し、大手建設会社の下請け（現場駐在）で、木製建具、カウンター等の施工図の作成及び建具等の据付けの現場管理（松山市宮田町郵政局本館棟）を担当しました。次に西条市の黒瀬ダム建設事務所（仮設備係）に就職しました。仕事の内容は、ダム本堤に必要な骨材の調査《同地区の河川を素掘りし骨材の粒度調査及び原石（碎石）山の測量調査》を行ないました。黒瀬ダム建設事務所は、同市、神拝小学校の南隣にありました。近くに、西条土木事務所建築指導課があり、同課の課長さんから、建築職に空きがあるので、移籍しないかとの声がかかり、結果、昭和45年4月、県建築住宅課に移籍しました。その後、各地方局建築指導課と同建築住宅課を交互に勤務し、平成20年3月、愛媛県南予地方局（建築指導課）を最後に退職しました。

◆宇和土木事務所時代の思い出（平成元年頃）

建築士会宇和支部青年部が地元の筏流し大会に参加することが決まり、私も参加させて頂きました。

- お椀形（一寸法師）の丸い筏なので、優勝は無理ですが、笑いを誘い好評でした。
- 打上げは、青年部、会員さんの自宅で行い、夜遅くまで、酒を酌み交わし、話が弾み楽しい一夜を過ごしたことを思い出します。（その会員さんとは、現在も、お付き合いをさせていただいています。お互い年をとりましたが）

更に、平成20年4月から、愛媛県建築士会事務局へ勤めさせて頂き、令和3年3月に退職しました（会員の皆様13年間、大変お世話になりました）。

【釣りについて】

①メバル釣り（昭和51年から10年間）

私の弟とメバルの夜釣りに行ったのが、釣りの始まりでした。土曜日の夕方、松山を出発し現着、カップヌードルと熱燗で冬の寒さに、ほっと、一息つきました。

- 釣場：津島町嵐、宇和島市遊子、長浜町、興居島
- 目標：30cm以上 目標達成ならず 最長28cmです。

②チヌ釣り（昭和61年から10年間）

職場の同僚（10人）と「チヌ研AFC」を発足、毎年春に発足を開き、御荘町の宿に泊まり、秋には反省会を開き、表彰式では来年の抱負・目標を語り合いました（飲み会目的です）。

- 釣場：御荘町赤水、伊方町、三崎町、長浜町沖浦

- 目標：50cm以上 目標達成 最長53cmです。

③アユの友掛け（平成元から現在）

大洲市勤務時代、地元の釣りクラブに参加、グレ釣りを中心に南予の磯（御五神、武者泊、高知県沖ノ島）釣りを行っていましたが、初めてアユの友掛けに挑戦、7匹も掛かり、虜となり、現在に至っています。

- 釣場：大洲市肱川、内子町大瀬
- 目標：30cm以上 最長27cmです。



▲ワンちゃんとアユの友掛け（大洲市藤の川）

【ワンちゃんについて】

今治市の職場時代（平成13年）、同僚の知り合いから子犬（大型犬：女の子）のもらい手がないかとの話があり、妻に相談したところ、犬は好きでないとのことでしたが、子犬に合わせたところ、「可愛い、可愛い」と連発の結果が、同居の始まりでした。



▲クンクン

それから1年くらい後に、妻いわく「一匹では、寂しそうなので、もう一匹と呟きました」。その後、2匹目の同居犬が決まりました。

更に、妻いわく「室内犬も飼いたいと呟きました」。その後、3匹目の同居犬（小型犬：女の子）が決まりました。

現在は、ワンちゃんに囲まれ、楽しく過ごしています。ワンちゃんは、かけがえのない家族の一員です。

- 散歩：健康になります。
- 夫婦の会話：ワンちゃん中心に話が弾んでいます。



▲遊ぼうよ



▲おやつちょうだい

次のバトンは渡部聡さんです。よろしくお願いたします。

古民家に学ぶ

宇和島支部 與那原 浩

宇和島支部の石川淳さんよりバトンを受け取った與那原です。昨年、還暦になり、いい機会なのでこれまでの振り返りと今後について書かせて頂きます。

私は1961年に沖縄県宮古島で生まれました。本土復帰前の1971年に群馬県前橋市に家族で移住しました。父が家具職人で、前橋市の家具メーカーに転職したためです。父の影響もあり、幼い頃から木工に興味を持つようになり、前橋工業高校建築科に進学。建築計画の授業で、ガウディ・コルビュジエ・ミースなどの巨匠を知り、丹下健三・磯崎新・吉村順三など日本を代表する建築家に憧れを抱いたことが、設計の道を選んだきっかけになりました。

高校在学中は建築研究部に所属し、2年時に(社)日本建築協会主催第24回工高生デザインコンクール入選、3年時に日大理工学部主催第26回全国工業高等学校設計競技3等を受賞。また、3年時には生徒会長として夏の甲子園大会に野球部の応援に行くなど充実した高校生活を送りました。

卒業後は、地元の設計事務所で働きながら、夜間の前橋市立工業短期大学(現前橋工科大学)で学び、仕事と短大の勉強でハードな日々を送りました。そんな時、青年海外協力隊員募集の記事を目にし、群馬から飛び出し海外で見聞を広めたいとの思いが募りました。2級建築士免許取得を機に事務所を退職。青年海外協力隊員に応募しましたが結局、最終面接で不合格。人生初の挫折を経験しました。しかし、元来深く悩まない性格なので、この機会に国内の有名建築を巡ろうと決意、主に磯崎新・安藤忠雄の作品を中心に旅を続け、この時初めて四国にも立ち寄りました。

時代はバブル最盛期の好景気に沸いていました。無職状態の私に、東京の設計事務所に勤める先輩から仕事を手伝ってほしいと声がかかり、25歳の秋に東京へ。その設計事務所は主に賃貸マンション・テナントビル・オフィスビルの設計監理業務に携わり、27歳で7階建のマンションを担当。大手ゼネコンの施工で竣工出来た喜びは今でも鮮明です。

東京の設計事務所でも14年間勤める中で、宇和島出身の妻と出会い1990年に結婚。翌年に1級建築士試験に初挑戦し合格。二人の男の子にも恵まれました。そろそろ独立を考えていた頃、宇和島の義父の体調が悪化。2000年春に宇和島市三間町の妻の実家に移住しました。



◀ 太宰家 鳥瞰

太宰家 土間の小屋組
(土間は三和土) ▼



その家は、築200年超の古民家「太宰家」です。

「太宰家」は故犬伏武彦先生著「民家口マンチック街道-伊予路」「民家と人間の物語」にも掲載されているような文化財級の古民家です。最大の特徴は巨大な茅葺き屋根を支える小屋組みで、梁は丸太断面を太鼓に落とし、うねるように生まれ、小屋貫の直行する線と梁の曲線が美しい造形美を醸し出しています。21年間毎日小屋組みを観ていますが、飽きることはありません。

移住して間もなく設計事務所を開業しました。事務所は昔男衆部屋として使われていた長屋門の一室に構えました。長屋門で1級建築士事務所を構えているのは、愛媛県では私だけではないでしょうか。木造の住宅設計は初めてでしたが、納まりなど分からない事ばかり。腕のいい棟梁に恵まれ、無事完成できました。建築主さんの紹介で2軒目、3軒目の住宅も完成することができました。3つの住宅に共通しているのは、自然素材を内装材に使用したことと小屋組みの架構を表しにしたことです。古民家で用いられている要素を設計の中に取り入れていきたいとの思いからでした。

その思いを確かにしてくれたのが、故吉田佳二先生との出会いでした。内子町が公共施設の設計監理を吉田先生に依頼したことで1年間開催された「内子住まい塾」に参加し、広がり空間の設計を学びました。おかげで進むべき方向が定まりました。それは、日本の伝統建築の良さを生かし、心地よい生活空間を設計していくことです。そのコンセプトで完成した第一作目の住宅が「内子住まい塾」を機に設計依頼されたI様邸です。



▲ 内子町大瀬地区 I様邸 居間

大瀬地区ではI様邸の他、町並み修景事業にも携わり、そのご縁で内子町八日市護国伝建地区の修理事業にも現在携わらせて頂いております。古民家再生のスキルアップのため、愛大農学部森林管理リカレントコースで学んだり、ワークショップ「き」組を主宰する松井郁夫先生の「古民家再生ゼミ」を受講するなど研鑽に努めてきました。また、林業従事者の育成のため、令和4年度よりスタートする南予森林アカデミーで木造建築概論の講師をする予定で、学んだ知識を伝えていきます。

吉田先生との出会いから、今年で21年になります。先生が塾生に口うるさく言っていた「広がり空間」を肝に据え、使命となる古民家に学ぶ家づくりを今後も続けていきたいと思っております。次回は宇和島支部の豊田恵介さんへバトンを繋ぎます。宜しくお願致します。

令和4年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について

令和4年度「地域貢献活動基金助成対象事業」の募集について 〔建築士会は、まちづくり活動を支援します〕

公益社団法人愛媛県建築士会は、会員の皆さんが地域のみなさんと共に行う社会貢献事業や建築士会の内部組織（研究会等）が実施する地域貢献活動としての事業を応援します。

すでに活動をしている方も、これから何か始めようという方も、一定の条件を満たせば事業に助成金を活用することができます。

1. 助成の対象事業の内容

会員が参画する以下のテーマに沿った営利を目的としない地域貢献活動が対象です。

- | | |
|----------------------|-----------------|
| (1) 地域のまちづくり | (2) 景観の保全 |
| (3) 居住環境の保全・整備 | (5) 福祉環境の整備 |
| (4) 自然環境の保全・整備 | (7) 地域防災づくり |
| (6) 地域住宅づくり | (8) 歴史的遺産の再生と活用 |
| (9) その他、地域活性化、社会サービス | |

2. 助成の対象

- 建築士会会員が参画する地域貢献活動に対する活動助成
- 国、地方公共団体から、建築士会に対しての委託事業、人材派遣に関連して進められる地域貢献活動に対する活動助成
- 地域貢献団体助成事業運営委員会が助成を必要と認めた地域貢献活動に対する活動助成

3. 助成金

- 1件当たり限度額50万円とし、助成率は事業活動費の3分の2とします。
(継続的事業の場合は3年を限度とします)

4. 応募手続き

- ①助成申請者は

- 申請時に組織内に建築士会会員として継続して在籍が3年以上の者が複数参画している活動団体の代表者
 - 建築士会の内部組織（研究会等）の代表者で上記2の助成事業を行おうとする者。
- ②助成申請書は規定の申請書により申請してください。
(申請書はHPからダウンロードできます)

<http://www.ehime-shikai.com/other/6734.html>

5. 応募期間

令和4年4月1日～5月31日まで（事前問い合わせは随時受け付けます。）

※応募期間前であっても、仮受付をしますので、お申し出ください。

6. 助成対象事業の決定と助成金交付等について

- 助成対象事業の趣旨に沿った事業かどうかを基準に「愛媛県建築士会地域貢献団体助成事業運営委員会」が審査します。助成額の決定は、申請書受理後60日以内に書面にて通知します。
- 事業の実施期間は、助成額決定日から令和5年3月31日の間に実施される活動を基本とします。
- 助成金は、交付申請者に対して、助成金交付決定通知後の助成金請求に基づき交付します。
- 交付申請者には、活動の内容・助成金の管理・報告書の提出に責任を持っていただきます。

7. 助成事業一覧について（事例）

年度	事業名		助成額	備考
2017年度	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	10万円	1年目
2018年度	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	2年目
	松山市	女性と防災の会	5万円	1年目
2019年度	松山市	建築士による木造住宅の耐震化を促進する会	20万円	3年目
	松山市	女性と防災の会	8万円	2年目

提出及び問合せ先：公益社団法人愛媛県建築士会

〒790-0002 松山市二番町4-1-5 建築士会館2階

TEL：089-945-6100 FAX：089-948-0061 E-mail：lee04603@nifty.ne.jp